

看 護

1 研究のテーマ

(1) 研究テーマ

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた組織的な授業改善の推進
～病態関連図作成による学習過程を通して患者理解を深める授業実践～

(2) 研究のねらい

単元全体における肺炎の病態関連図(参考資料1)の作成を通して、呼吸器疾患についての深い理解を促すとともに、根拠に基づいた適切な援助を導き出すための看護の見方・考え方を育成することを目的として、主体的・対話的で深い学びの視点から授業を実践し検証することとした。

2 実践事例

(1) 単元の指導と評価の計画

ア 科目名：疾病の成り立ちと回復の促進

イ 単元名：呼吸機能の障害

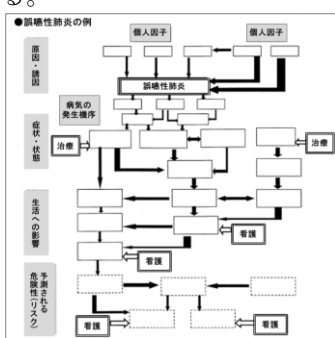
ウ 単元の目標：

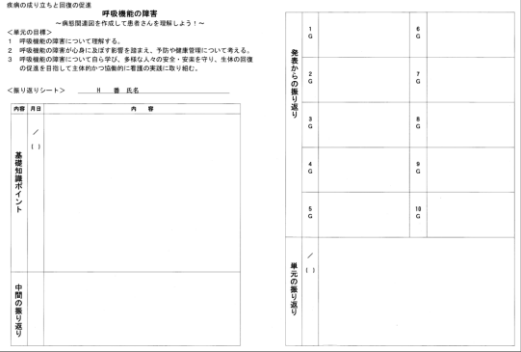
- ・呼吸機能の障害について理解する。
- ・呼吸機能の障害が心身に及ぼす影響を踏まえ、予防や健康管理について考える。
- ・呼吸機能の障害について自ら学び、多様な人々の安全・安楽を守り、生体の回復の促進を目指して主体的かつ協働的に看護の実践に取り組む。

エ 単元の評価規準

知識・技術	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
呼吸機能の障害について理解している。	呼吸機能の障害が心身に及ぼす影響を踏まえ、予防や健康管理について考えている。	呼吸機能の障害について自ら学び、多様な人々の安全・安楽を守り、生体の回復の促進を目指して主体的かつ協働的に看護の実践に取り組もうとしている。

オ 単元の指導と評価の計画 ○「記録に残す評価」 ●「指導に生かす評価」

次	時	学習活動	知	思	態	評価のポイント・指導上のポイント
1	1 2 3	<p>・事前学習のレポートの内容をいかしながらグループで協議し、Google Jamboardを使用して、誤嚥性肺炎の病因やメカニズムについての病態関連図(図1)を作成する。</p>  <p>図1 病態関連図 図1 病態関連図は総合教育センターWebページにてダウンロードできます。</p>	○		●	<p>知 誤嚥性肺炎の病因やメカニズムについて理解している。 (病態関連図・定期試験)</p> <p>態 誤嚥性肺炎の病因やメカニズムについてメンバーと協議し、グループでより良い病態関連図を作成しようとしている。 (活動の観察)</p>

2	4 ・ 5	<ul style="list-style-type: none"> 前時に作成した病態関連図の内容を発展させて、誤嚥性肺炎の臨床症状、合併症、生活への影響をグループで協議して、病態関連図に表す。 誤嚥性肺炎の基礎的知識についての振り返りを行う（図2）。  <p style="text-align: center;">図2 振り返りシート</p> <p>図2 振り返りシートは総合教育センターWebページにてダウンロードできます。</p>	○	○	<p>知 誤嚥性肺炎の臨床症状、合併症、生活への影響を理解している。 (病態関連図・定期試験)</p> <p>態① 誤嚥性肺炎の臨床症状、合併症、生活への影響についてメンバーと協議し、グループでより良い病態関連図を作成しようとしている。 (活動の観察)</p> <p>態② 誤嚥性肺炎の基礎的知識についての学習の取組みを具体的に振り返り、今後の学習についての見通しを持ち取り組もうとしている。 (振り返りシート)</p>
3	6 ・ 7 ・ 8	<ul style="list-style-type: none"> 誤嚥性肺炎患者の事例のデータを病態関連図に書き込み、患者の全体像を理解し、生活への影響や必要な看護と予防についてグループで協議し、病態関連図に表す。 	●	○	<p>知 誤嚥性肺炎の基礎的な知識を踏まえた関連図の内容となっている。 (病態関連図)</p> <p>思 疾患についての基礎的知識と事例のデータを関連付けて患者の全体像を捉え、誤嚥性肺炎が心身に及ぼす影響や必要な看護と予防について考えられている。 (病態関連図)</p> <p>態 誤嚥性肺炎の患者の全体像や生活への影響、必要な看護と予防について、メンバーと協議し、グループでより良い病態関連図を作成しようとしている。 (活動の観察)</p>
4	9 ・ 10	<ul style="list-style-type: none"> 誤嚥性肺炎の患者の理解についての発表を、グループ毎に行う。 他のグループの発表内容を参考にして、病態関連図の修正を行う。 単元全体の振り返りを行う。 	●	○	<p>知 誤嚥性肺炎の基礎的な知識を踏まえた発表となっている。 (発表内容、病態関連図)</p> <p>思① 疾患についての基礎的知識と事例のデータを関連付けて患者の全体像を捉え、誤嚥性肺炎が心身に及ぼす影響や必要な看護と予防について考えられた発表となっている。 (発表内容、病態関連図)</p>

					<p>思一② 他グループの発表からの気づきをいかして、関連図の修正を行っている。 (病態関連図)</p> <p>態一① 誤嚥性肺炎の患者の全体像や生活への影響、必要な看護と予防について、メンバーと協力して創意工夫し発表しようとしている。 (活動の観察)</p> <p>態一② 単元全体の振り返りを行い、看護の実践にいかそうとしている。 (振り返りシート)</p>
--	--	--	--	--	---

カ 授業実践例 (10時間目/10時間)

学習活動(・指導上の留意点)	評価の観点 (評価方法)
<p>【導入】</p> <p>①本時の学習目標を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習目標を理解し共有することで、生徒が主体的に学習に取り組めるようにする。 ・前回に発表したグループに引き続き、各グループメンバー全員で発表させる。 ・他グループの発表内容をいかして、病態関連図を修正できるように意識付ける。 <p>【展開】</p> <p>②誤嚥性肺炎の患者の看護について、グループ毎に発表する(図3)。</p> <div data-bbox="341 1249 874 1545" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: center;">図3 グループによる発表の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・誤嚥性肺炎の基礎的知識と関連付けて、患者の全体像をどのように捉えたかについて、病態関連図を用いて具体的に説明させる。 ・なぜその看護や予防が必要だと思ったのか、理由を明確して説明させる。 ・発表時間は1グループ5分とし、重要だと考えることを中心に、グループメンバー全員で工夫してわかりやすく発表させる。 <p>③発表を通して、誤嚥性肺炎の患者の看護について、理解を深める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表を通しての気づきや学びをグループで共有し、病態関連図を修正させる(図4)。 ・修正した病態関連図を、クラス全体で共有させる。 ・病態関連図のポイントを確認する。 	<p>思一① 疾患についての基礎的知識と事例のデータを関連付けて患者の全体像を捉え、誤嚥性肺炎が心身に及ぼす影響や必要な看護と予防について考えられた発表となっている。 (発表内容、病態関連図) <手だて> なぜその看護が必要だと思ったのか理由を聞き、疾患と看護の関連性に気付かせる。</p> <p>態一① 誤嚥性肺炎の患者の全体像や生活への影響、必要な看護と予防について、メンバーと協力して創意工夫し発表しようとしている。 (活動の観察) <手だて> 発表方法などについての具体的なアドバイスなどを行う。</p>

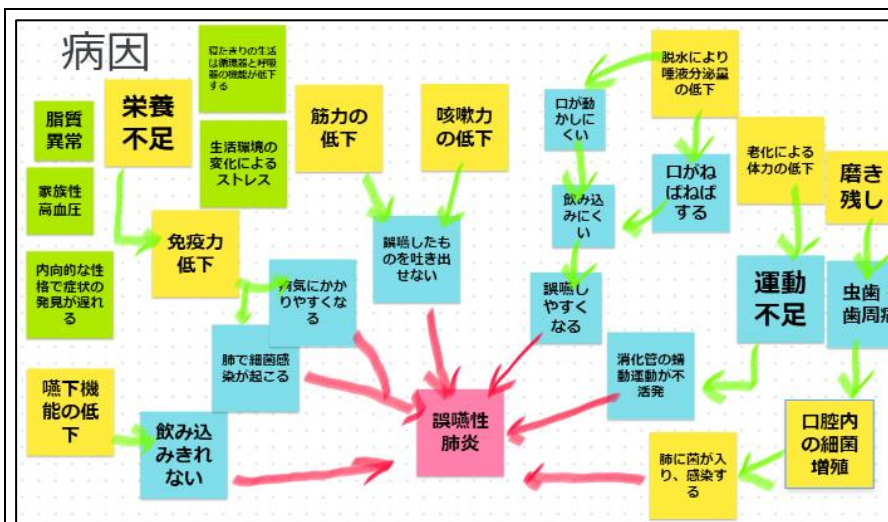


図4 修正した病態関連図の一部(病因)

④ 単元全体を振り返る。

- ・ 単元全体を振り返り、自分の気づきや学びを振り返りシートに記入させる。
- ・ 単元を通して、最も印象に残ったことを、Google Jamboardに記入させ、クラス全体で共有させる。

【まとめ】

⑤ 本時のまとめと単元のまとめを行う。

- ・ 疾患の病因やメカニズム、症状などを、根拠を考え関連付けながら丁寧に学習することが重要であること、また、それらの正しい疾患の知識に基づいて、患者の全体像を捉え、その人に合った個別性のある看護を導き出すことが大切であることを意識付ける。
- ・ 本単元での学習方法を、他の疾患や症状を学習する際にもいかして、主体的に学習することの重要性を伝える。

思—②

他グループの発表からの気づきをいかして、病態関連図の修正を行えている。

(発表内容・病態関連図)

<手だて>

不足している情報などがあれば、アドバイスする。

態—②

単元全体の振り返りを行い、看護の実践にいかそうとしている。

(振り返りシート)

<手だて>

自分が学んだことを大切にしていけるか考えるようにアドバイスする。

研究実施校：神奈川県立二俣川看護福祉高等学校(全日制)

実施日：令和5年11月10日(金)

授業担当者：安達 ゆかり 教諭 池端 万須美 総括教諭
伊藤 ゆき 教諭

(2) 「指導と評価の一体化」の視点を踏まえた主体的・対話的で深い学びの実現に向けた指導と評価のポイント

ア 病態関連図の作成による情報の可視化について

病態関連図とは、疾病の病因、発生機序、症状、生活への影響、治療、看護問題等を書き出したもので、これにより患者の全体像を把握することができる。病態関連図では、一定のルールに基づいて情報を矢印でつなぎ関連性を示すことで、情報を整理したりまとめたりすることが可能となり、看護問題を明確にして適切な援助を導き出すことができる。看護師養成の教育機関では、看護の思考過程である看護過程を学習するために、看護臨地実習などの記録物に取り入れられ、受け持ち患者の看護を導き出すために活用されている。今回、高等学校の学習の中にも取り入れ、病態関連図の作成を通して、疾病の特徴とともに個別的な患者の情報を視覚化して患者を深く理解することで、根拠に基づいた個別性のある看護を導き出す力を育てることを目指した。病態関連図を作成する事例としては、「看護臨地実習」の集中講義で取り組んだ誤嚥性肺炎の事例を活用し、既習の基礎的な知識を基に、今回の発展的な学習内容に対して生徒が安心して取り組めるようにした。病態関連図の作成に当たっては、その目的や基本的な書き方のルールの説明とともにその基本的な書き方の見本を示した。しかし、図式化して示すことが生徒にはイメージし難く、特に病態に関連する部分の作成が進まないグループが多かった。そのため、生徒の進行状況に合わせて、参考になるインターネット上の資料などを

紹介しながら繰り返し説明を行った。また、書き方のルールは最小限にして、生徒が考えたことをできるだけ自由に表現できるようにした。図式化については、「看護情報」の科目でのアルゴリズムについての学習を想起させ、理解を促した。これらの結果、最初の病態についての作成には時間がかかったが、その部分が理解できると、次の段階である症状や生活への影響、看護については、グループで相談しながら主体的に進められていた。教員が生徒の理解や課題の進捗状況を把握しながら、時間毎に達成すべき目標をスモールステップで示し、目標達成のために必要な知識の補足やグループでの進め方のアドバイスを行い、フィードバックを繰り返しながら、生徒とともに進め方を修正していったことが、最終的な課題の達成につながったと考えられる。病態関連図の作成には時間を要するが、文献学習でインプットした知識を、図式化してアウトプットする作業を通して、疾患についての正しい理解と知識の定着につながったと考える。また、1つの事例について丁寧に取り組み、根拠に基づいた適切な援助を導き出すための看護の見方・考え方を身に付けることができた。このことは、今後の看護の学習に必要な様々な疾患や症状についての学習に応用できる力になるとともに、将来、上級学校に進学して資格取得していく際の、自ら看護を学ぶ姿勢に繋がると考えられる。

イ グループによる協働的な学習の効果について

今回、病態関連図の作成については、グループで協働的に取り組ませることで、病態についての知識が深められることと、全人的、多面的に患者を理解することによって、個別性のある援助を様々なアプローチの仕方と考えられるようになることを目指した。病態関連図の作成については、グループで修正などの共同作業が行いやすいように、Google Jamboardを活用した(図5)。事前課題である誤嚥性肺炎の疾病に関するレポートでは、生徒により取り組み方に差があり、学習内容が不足している者も一部見られた。そのため、各自が調べた内容をグループで



図5 Google Jamboardでの病態関連図作成

共有させ、病態や症状までの病態関連図が作成できた中間時点で、基礎知識のポイントについて各自でまとめさせ、基礎知識の理解についての確認を行った。事前課題で学習が不十分で病因の記載がなかった生徒も、中間時点では全員が病因について記入できていた。中間時点の振り返りシートには、「疾病を理解するためには、症状や治療だけではなく、疾病の原因を知ることが大切だと気付いた。」「様々なことが関係して病気になることがわかり、病気になる原因をしっかりと考えて、看護を考えていく必要があると思った。」などの記述があった。また、生徒の最終の振り返りでは、「グループで話し合うことで、自分が気付かなかった視点に気付くことができた。」「お互いの意見を大事にして話し合う中で、疾患についての理解が深められ、患者さんに合った看護が導き出せた。」「グループワークで、自分が調べられていない知識を得ることができ、様々な病気の要因やリスクなど、自分だけでは見えなかった部分が見えてきた。」「人の意見を否定せず受け入れて、自分も他の人の情報から疑問を持って調べてみることで、新しい発見ができて、考え方が広がった。」など、グループワークを通して学びが深まったことについての感想や意見が多く述べられていた。

ウ 「主体的な学習に取り組む態度」の評価について

今回の単元についての観点別学習状況の評価で、「主体的な学習に取り組む態度」については、次の二つの視点から評価を行った。まず、「①粘り強く学習に取り組む態度」の視点では、グループワーク、発表などの授業中での活動の観察や振り返りシートの内容から見取り、「a グループメンバーと協力して、創意工夫しながら効果的に取り組んでいる」「b グループメンバーと協力して取り組んでいる」「c グループメンバーとの協力や取り組みが不十分である」の3段階で評価した。

また、「②自ら学習を調整しようとする態度」の視点では、「a 振り返りを十分に行い、今後の学習の進め方について自ら考えられている」「b 振り返りは行っているが、今後の学習の進め方については考えられていない」「c 振り返りが不十分で、今後の学習の進め方について考えられていない」の3段階評価で、単元の間と終了時に振り返りシートの記述から読み取り評価した。

単元の評価として、①②の評価において両方がaだった者は「十分満足できる(A)」、①②の両方がb、または①がa②がb、①がb②がaだった者は「おおむね満足できる(B)」、①または②がcだった者は「努力を要する(C)」とした。

エ 生徒アンケート結果より生徒の変容について

病態関連図作成による学習過程を通して患者理解を深めることの変容の見取りについては、単元の前においてアンケート調査を行い、比較・検討を行った。質問項目は次のとおりである。質問①～④は四件法とし、質問⑤は記述式とした。(授業前 N=37、授業後 N=36)

- 質問① 誤嚥性肺炎の病因やメカニズムがわかりますか。
 質問② 誤嚥性肺炎の臨床症状、合併症、生活への影響がわかりますか。
 質問③ 誤嚥性肺炎の患者に必要な看護と予防がわかりますか。
 質問④ 患者さんに適した看護を導き出すためには、どのようにしたらよいか、わかりますか。
 質問⑤ 患者さんに適した看護を導き出すためには、どのようにしていくべきだと思いますか。

質問①～④の質問について、「よくわかる」または「わかる」と回答したものの割合は、全ての質問において、授業前より授業後が高くなっていった。特に「よくわかる」と答えたものの割合が増加していた。

質問①「誤嚥性肺炎の病因やメカニズムがわかりますか。」については、「よくわかる」「わかる」と回答したものの合計は、授業前のアンケートでは89.2% (33名)であり、授業後は97.2% (35名)となった(図6)。特に、「よくわかる」については、授業前16.2% (6名)から授業後55.6% (20名)と増加した。「基礎看護」や「看護臨床実習」においても、基本的な疾患の特徴について学習しており、今回の授業前においても、生徒は基礎的な知識はある程度持っていたが、今回の授業を通して、誤嚥性肺炎についてより深く理解できたと考えられる。授業後の生徒の感想では、「誤嚥性肺炎について、これまでの授業で知っていると思ったが、自分の知らないことがたくさんあった。患者様の看護をするためには、疾患について正しく知ることが大切だと思った。」などがあった。

質問②「誤嚥性肺炎の臨床症状、合併症、生活への影響がわかりますか。」については、「よくわかる」「わかる」と回答したものの合計は、授業前のアンケートでは75.7% (28名)であり、授業後は100% (36名)となった(図7)。「よくわかる」については、授業前2.7% (1名)から授業後50.0% (18名)と増加した。誤嚥性肺炎は、校内実習などで学習した疾患であったため、症状についてはイメージしやすかったようで、スムーズに病態関連図の作成が進められていた。授業後の生徒の感想で、「これまでの授業で行った実習から、患者さんの症状などをイメージできたので、病態関連図にいかすことができた。」などとあり、既習内容をいかして効果的に取り組めたと考えられる。

質問③「誤嚥性肺炎の患者に必要な看護と予防がわかりますか。」については、「よくわかる」「わかる」と回答したものの合計は、授業前のアンケートでは70.3% (26名)であり、授業後は100% (36名)となった(図8)。特に、「よくわかる」については、授業前5.4% (2名)から授業後66.7% (24名)と増加した。各グループで、最終的に挙げた看護としては、「口腔ケア」「食事介助」「体位変換」など、様々な援助が挙げられたが、どのグループも、なぜその援助が必要だと思ったかという看護を導き出した理由を丁寧に述べられていた。それは、各グループの発表を通して、様々な看護の方法があることに気付けたからだと考えられる。「患者さんの看護には色々な方法があるのだということがわかり、自分の視野が広がった。」「他のグループの発表を聞き、自分のグ

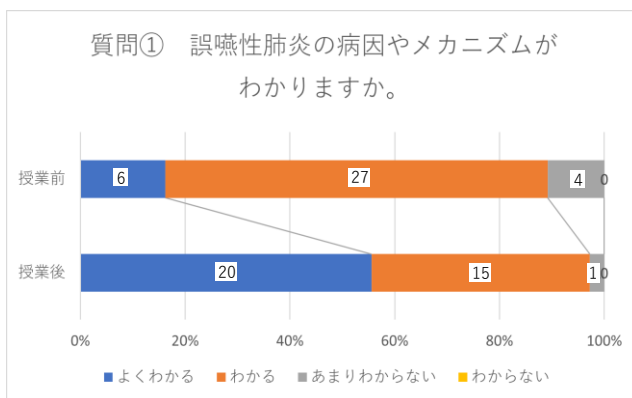


図6 アンケート質問①

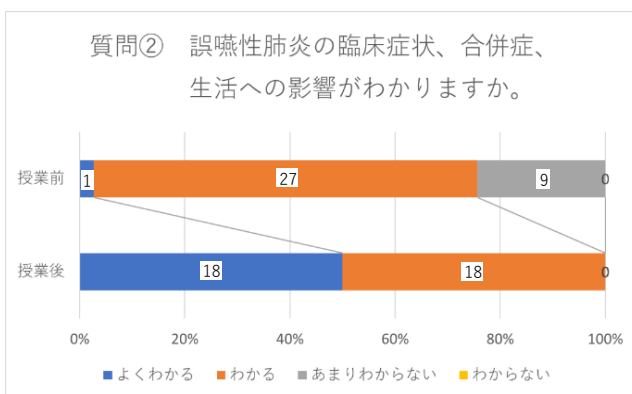


図7 アンケート質問②

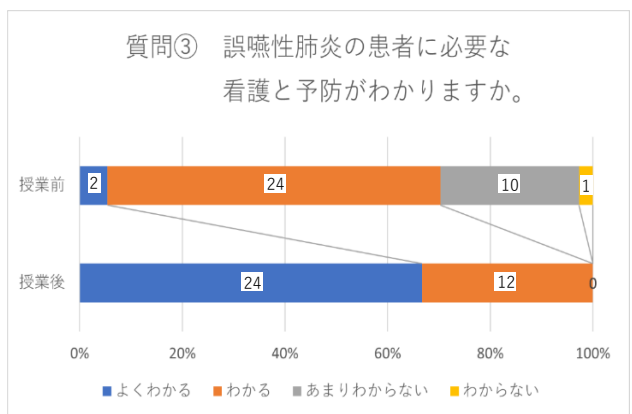


図8 アンケート質問③

ループとは違う援助方法だったが、理由を聞き納得できた。」などの感想があった。

質問④「患者さんに適した看護を導き出すためには、どのようにしたらよいか、わかりますか。」については、「よくわかる」「わかる」と回答したものの合計は、授業前のアンケートでは56.8% (21名)であり、授業後は100% (36名)となった。「よくわかる」については、授業前0% (0名)から授業後41.7% (15名)と増加した(図9)。質問④については、①②③の内容を理解した上で理解が成り立つ発展的な内容のため、「よくわかる」と回答したものは41.7% (15名)と、4項目の中では低かったが、「あまりわからない」「わからない」と回答したものはおらず、看護を導き出す過程について一定の理解が得られたと考えられる。生徒の授業後のアンケートでは、「個性のある看護を導き出すためには、基本となる知識が必要であるということがわかった。」「病因や症状などをつなげて考えて、患者さんに適切な看護を見つけ出す流れがわかった。」「看護の正解は1つではなく、患者さんに合った看護を見つけることは難しかったが、だからこそおもしろいと思った。」などの感想があった。

質問⑤「患者さんに適した看護を導き出すためには、どのようにしていくべきだと思いますか。」の質問に対し、記述式での回答を求めたところ、「症状や治療から看護を考えるのではなく、背景にある患者さんの生活や原因となることなどにも注目することが大切だと思う。」「今起きている症状だけに着眼するのではなく、知識を基に観察などもしっかり行い、様々な視点から考えて行くことで、目に見えないリスクなどを考え予防していくことができる。」など、情報を多面的に捉えて根拠に基づいた看護を導き出すことに着目した生徒が多かった。また、「一人だけで考えずチームで協力して意見を交換し、患者様にとってより良い方法を導き出していくことが大切だ。」「一人では限られた範囲内での看護しか考えることができないため、チームで多くの意見や考えを出すことによって幅広い看護を考えることができる。」など、チームで看護を多面的に考えていくことの重要性に気付いた生徒も多かった。その他、「患者さんの性格や気持ち、生活の状態などについてよく知り、その人に合った看護を考えて行くことが大切である。」「患者さんの背景から病気に至るまでの事柄を様々な視点から考え、患者さんの全体像を把握することで、必要な看護を導き出すことができる。」など、患者さんを理解することや個性のある看護の重要性について述べている生徒も多かった。質問④の結果と合わせ、看護を導き出す過程やそのポイントについての学びが見取ることができた。

オ 今後の展望

今回の病態関連図の作成を中心とした学習は、呼吸器疾患についての深い理解を促すとともに、適切な援助を導き出すための看護の見方・考え方の育成につながったと考えられる。看護には様々なアプローチ方法があり、患者の状態などにより異なる。そのため、正確な知識を基に情報をアセスメントし、根拠を持って必要な援助を導き出すことが、看護師には求められる。疾病のメカニズムを明確にして、それらの情報に患者の個別情報を加えて、患者の状態を判断し必要な援助を導き出すという今回の学習を通して、看護を導き出すための過程について理解を深められたと考えられる。さらに、今回できるようになったことを定着させ、様々な看護問題の解決に応用していける力を育成するために、他の疾患の学習事例においても今回の学習をいかすように意識付けることや、援助の根拠として疾患のメカニズムなどを明確にさせることなどを継続して行っていきたい。学習にあたっては、専門科目の「人体の構造と機能」や普通科目の「生物」などと連携して、科目横断的な学びをすることが有効である。これらは、将来、看護師資格を取得するために進学する上級学校で、看護過程などのより深い学習を行う際の基礎にもつながる。このようなことを踏まえて、学年の学習段階に合わせて組織的に学習計画を立案し、効果的な学習を展開していきたい。

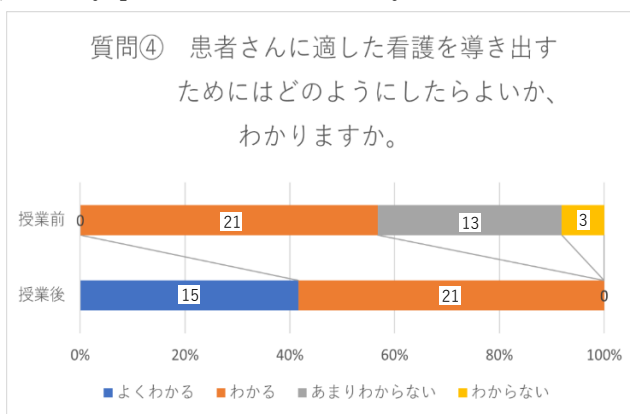


図9 アンケート質問④

図 1

疾病の成り立ちと回復の促進

●病態関連図（関連図）とは

病態関連図とは、患者の病気の情報や看護問題などを示した関連図です。

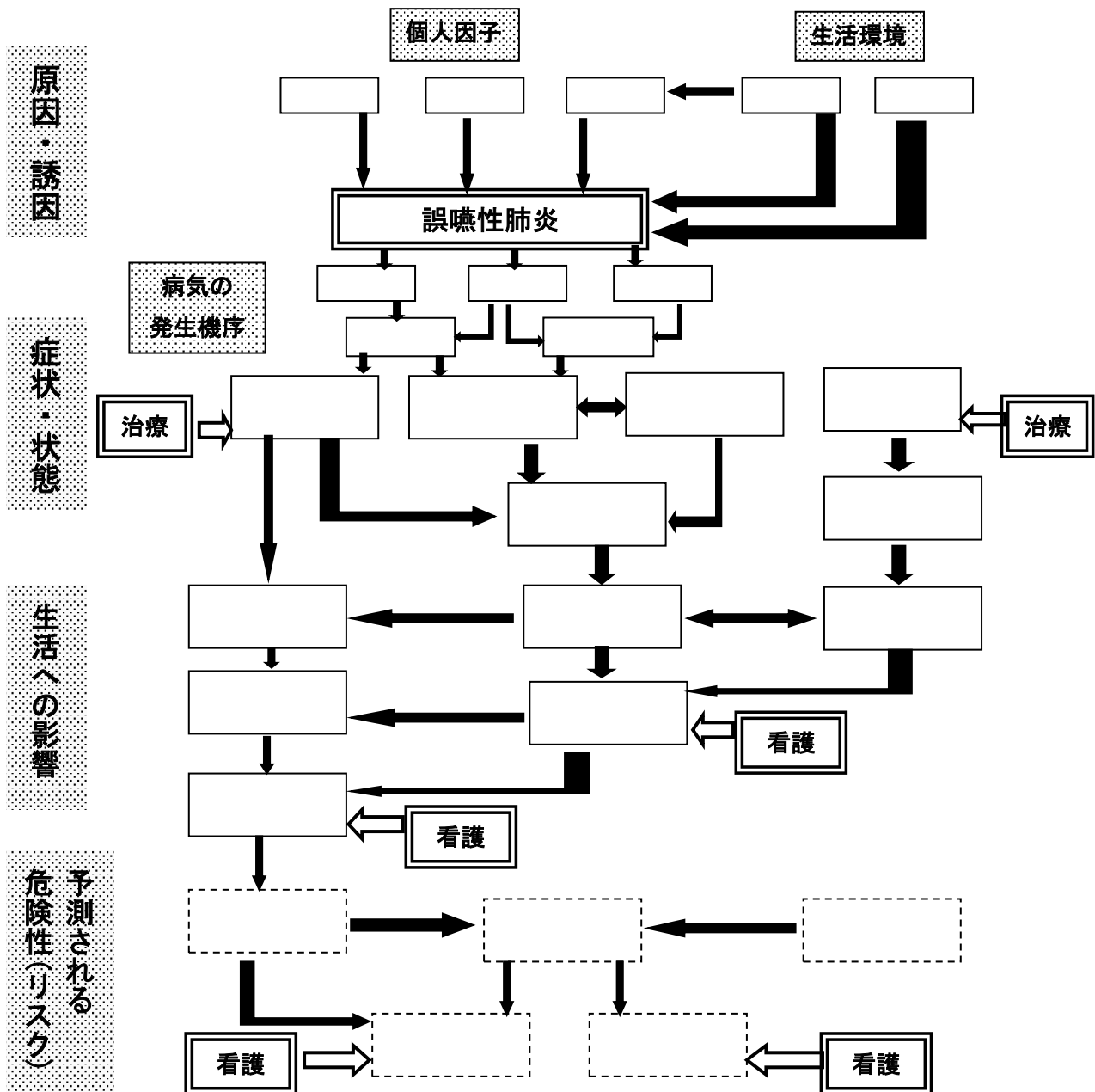
病態関連図には、患者の病気の原因、発生機序(メカニズム)、症状、治療や治療に伴う作用・副作用を書き出します。さらに、治療の作用や副作用により起こりうる生活への障害や看護問題を矢印でつながった形で書いていきます。

病態関連図は、患者の全体像を把握するために書き出します。線と線をつなぎ、情報を整理することで、情報を一つにまとめることが可能です。患者と病態、生活背景、心理的要因の全体を把握することで、適切な看護ケアにつながります。

関連図は目的によって、書く内容が異なります。また、わかりやすくするために、書き方のルールを決めて、表します。

※ 原因 → 結果(起こること) ※点線…まだ起こっていないこと など

●病態関連図の例



呼吸機能の障害

～病態関連図を作成して患者さんを理解しよう！～

<単元の目標>

- 1 呼吸機能の障害について理解する。
- 2 呼吸機能の障害が心身に及ぼす影響を踏まえ、予防や健康管理について考える。
- 3 呼吸機能の障害について自ら学び、多様な人々の安全・安楽を守り、生体の回復の促進を目指して主体的かつ協働的に看護の実践に取り組む。

<振り返りシート>

_____ H _____ 番 氏名 _____ .

内容	月日	内 容
基礎知識ポイント	／ ()	
中間振り返り		

発表からの学び	1 G		6 G	
	2 G		7 G	
	3 G		8 G	
	4 G		9 G	
	5 G		10 G	
単元の振り返り	／ ()			